芹霊と
１００人の元カレ
3

芹霊と１００人の元カレ　３

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20169107

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, ♡喘ぎ, 律霊(別れています)

芹霊前提、師匠総受けです。律霊（別れています）が含まれます。
今回は♡喘ぎがあります。倫理がアレです

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ネタバレ
芹霊は別れません

芹霊と１００人の元カレ　３

このお話は、１００人の男に捨てられた師匠と、真っ直ぐな芹沢さんが、元カレたちを乗り越えて幸せな未来を掴むお話です。

※

「今日は良く来てくれた。相談所の方は大丈夫なのか？」
気怠そうにヨシフが書類のサインを確認しながら言う。
「ヘルプでエクボくんと花沢くん、影山くんが来てくれてるはずなので、心配無いです」
「そうか。そのメンツなら安心だな」
芹沢のサインがされた『防衛省』と判の押された書類の束を元に戻して、咥えタバコのヨシフが呟く。
「自衛隊日本政府直属超能力部隊へようこそ、芹沢克也。今日は能力測定が入るから長時間の拘束になるが、今後は任務がある時だけの呼び出しになるから、本業にほとんど支障は出ないと思う」
ヨシフは手で芹沢に立つようにジェスチャーして、そのまま移動を始めた。
「お前の身分は非常勤特別職国家公務員……いわゆる予備自衛官だ」
「すみません、あまり詳しくなくて……」
「普通の予備自衛官とはかなり違うから、気にしなくていい。鈴木統一郎も同じ身分で働いている。こっちは特赦のためだから無給だけどな。そうだ、これ聞いておかないとな。同じ現場に配属しても大丈夫か？」
「もちろんです！」
「そうか。気まずかったら言えよ」
分厚い防火扉を開け、ヨシフは陸上自衛隊静岡基地の研究棟に向かう。
「まだ取り消しできる間に言っておくんだが……お前はこれから特

殊自衛官として、国家の犬として、災害現場や紛争地帯、凶悪犯の制圧に派遣されることになる」
「……はい」
「そこではトリアージ……命の選択を強いられることもある。誰かを犠牲にして多くの人命を救う選択だ」
「……」
「敵や犯罪者ならいい。正直そんなに心は痛まん。だが、犠牲になるのは無辜の市民だったり、仲間だったり、友人だったり、家族だったり……恋人だったりする。自分の可能性もある」
立ち止まってヨシフは真夜中の新月のような瞳で芹沢を見つめる。
「覚悟できるか」
じわ、と芹沢は冷たい汗をかく。
「……分かりません。その時になってみないと……」
絞り出すような声に、ふっとヨシフは表情を和らげる。
「それでいい」
カチ、とタバコに火をつけた。
「こんな覚悟できる奴はどうかしてるよ。実際現場じゃ皆最善を探して苦しみ続けている。……試すような事を言って悪かった」
「いえ……」
「だがな、そういう現場に出くわすことはある。出くわしてしまうんだよ、この仕事してると」
ヨシフは遠い目をする。
「……俺がこの仕事ずっと続けてられるのはな、能力が人助けに抜群に向いてるからだ。犯人の拘束にもな。トリアージを極力避けてやってこれた。……それを知っておいてくれ」
ヨシフが黙ったその瞬間、ちょうど研究室についた。
「まずは健康診断だ。あ、研究用に血液は多めに貰うからな。それは了承してくれ」
「はい、大丈夫です」
芹沢はスーツから検査着に着替え、念入りな人間ドッグを受けた。データは全て機密扱いになると説明を受ける。
「鈴木統一郎ほどじゃないけど、かなり振り切れた値が出てるね。脳波の特殊パターンがこれだけはっきり出るのは珍しいよ」

戦闘服に白衣を羽織った研究者が嬉しそうにデータを芹沢に見せる。
「はあ……」
よく分からない芹沢はとりあえず生返事をしておいた。
「次は能力測定だ。まず爆発圧力・圧力上昇速度試験を行う。そこの戦闘服に着替えてくれ」
芹沢は陸上自衛隊の戦闘服に着替えてブーツを履き、大きな金属の球体の前に立つ
「こいつの中で的に向かって全力で攻撃してもらって、超能力の出力を調べる。好きな武器を選んで持って行っていい」
「じゃあ……傘をください」
「気張れよ、主にこの試験の結果で超能力者としてのランク……ようは給料が決まる。大事な試験だ」
「！が、がんばりますッ！」
「よし、球形試験容器の中に入れ」
ゴソゴソと芹沢は容器の中に入る。
球形の巨大な金属容器の中はほぼ真っ暗だったが、一点だけ赤く光っている埋め込み電球があった。
『芹沢、聞こえるか？見りゃ分かるだろうがその赤い点が標的だ。今から３回合図するから、それに合わせて全力で攻撃してくれ』
「分かりました」
『じゃあ早速行くぞ。３、２、１、撃て！』
ひゅ、と芹沢の腕が唸って、傘から斬撃が放たれる。
球形容器が震え、ビリビリと研究所の壁が鳴った。
『……っ、いいぞ……！もう一度だ。３、２、１、
てーっ！！！！』
芹沢は次は傘を振り下ろした。鋭い衝撃波が容器だけでなく、建物まで揺らす。
『最後だ。３、２、１、てーっ！！！！』
芹沢は渾身の力を込めて振り抜いた。
ドン、と衝撃波が自衛隊基地を揺らした。
『容器を開ける。壁から離れろ』
球形容器が開かれて光が差し込む。芹沢は目を細めた。

「うん……これは凄いな。１番弱い数値でも１００億hPa（ヘクトパスカル）を超えてる。とんでもない圧力だ」
「どういうことですか？」
「一気圧……大気圧は何hPaか知ってるか？」
「えと、１０１３……」
「そうだ。その約１００万倍ってこった。もっと分かりやすく言うと、広島原爆の５倍くらいの威力ってことだな」
「はあ」
「喜べ、めでたくランクアップだ。お前はこれから危険度Ｓクラスの能力者だよ」
「……ありがとうございます？」
「……給料が上がるってこった」
「ありがとうございます！！」
ヨシフは苦笑する。
その後も、ペグを抜き差ししつつ箸で豆を移動させる（もちろん超能力で）試験などを行い、およそ４時間かけて芹沢の能力が数値化されていった。
「単純爆圧平均１５０億hPa、マルチタスク最大２０個、器用さ値８０、IQ１１０、精神安定度９０……うん、こりゃあ訓練次第で伸びるぞ……給料もう少し上げれる」
「！……訓練受けたいです！」
「いい心掛けだ。また訓練案内するから、日時見て検討してくれ。今日はこれで終わりだ。着替えて帰っていいぞ」
「ありがとうございました」

基地から出る間際に。

「芹沢」
「ヨシフさん。どうしたんですか？忘れ物ですか？」
声をかけられて芹沢は振り返る。
「心配して色々言っちまったが、基本的にはこの仕事は誰かの幸せのために力をふるえる仕事だ、って伝えたくてな」
薄暗闇の中でヨシフのタバコの火が赤く光る。

「俺たちの、ともすれば呪われたと言っていいこの力で、誰かを守れる。救える。笑顔にできる。……やりがいのある仕事だ」
ぽん、とヨシフは手の甲で芹沢の胸を叩く。
「よろしくたのむぜ、芹沢陸佐」
「……はいっ！」
嬉しそうにヨシフの目元が細められる。
「じゃあ、また連絡する。そうだ、今日の分の謝礼はもう振り込まれてるから、帰ったら口座確認しろよ？」
「ありがとうございます……！！」
「おいおい、俺が払ったわけじゃねぇよ」
苦笑してヨシフは去っていった。

帰宅して。

「思ったより遅くなっちゃったな……」
芹沢は霊幻の携帯に電話をかける。通話中だった。
（口座でも見ておこうかな）
確か最初の話では１０万ほど貰えるということだった。芹沢はわくわくしながらネットバンキングにアクセスする。

どう見ても１桁多かった。

「よよよヨシフさん！？」
慌ててヨシフに電話する。
『なんだ』
「なんか、多く振り込まれちゃってるみたいで……！」
『ああ、伝え忘れてたか。ランクが上がってるから、謝礼はぐっと多くなる。大体１００万振り込まれてたか？』
「は、はい……！」
『じゃあ合ってるよ。要件はそれだけか？』
「は、はい」
『じゃあ切るぞ』
「はい」

切れた電話を見てじわじわと芹沢は嬉しさが湧き上がってくる。
（霊幻さんに美味しいもの食べさせたい）
芹沢はスマホで調味ホテルの最上階のレストランを開く。韓国料理であれだけ喜んでいたのだ、このフランス料理のコースだとどれだけ喜んでくれるんだろう、と単純に芹沢は想像してにへにへする。
（それから、それから、あの似合いそうな服をプレゼントしたい）
レストランの予約を終えたら、ヨウジヤマモトのサイトを見て、七万のパーカーを代引きでポチる。
（うーん、クレジットカード欲しいな……自衛官のIDカード提示したら作れるかな？）
芹沢は楽天カードの資料と申込書を申請しておいた。
そこまでやってはっとする。
（いけない、同棲できる部屋に移りたいんだから、お金おいておかないと）
芹沢はもう一度口座を確認して、スマホを抱きしめる。
（でも……少しぐらい使ってもいいよね？）
またにへにへと笑った。

※

「霊幻さん、今晩楽しみにしててくださいね」
「またそれかよ……はいはい」
霊幻をレストランに連れて行く日。芹沢は朝から何度も霊幻に念押ししてしまっていた。嬉しくて仕方ないのだ。
霊幻も苦笑しながら返すようになってしまった。
はたして業務が終わって。
「せ、芹沢、ここ……」
お高いホテルに霊幻の顔がひきつる。
「予約してあるんで大丈夫ですよ」
「か、金はどうしたんだよ！！ウチの給料じゃ、こんなとこ……！！」
「ほら、前話してた自衛隊バイト。あれの謝礼が入ったんです」
「そ、そうなのか……？」

席に座ってコースが始まっても、霊幻は目を白黒させている。
「キャビアの次にフォアグラが来たんだけど！？一体何万のコースだよこれ！」
「５万です」
「ひえぇ……お前自衛隊から一体いくら貰ったんだよ……」
「えーと、百にじゅう……」
「いやいやいや答えなくていい！……危ない仕事じゃないのか？」
ぱく、と料理を食べてその美味しさに顔を青くしながら霊幻が芹沢にきく。
「全然。ヨシフさんもしっかり面倒見てくれるみたいですし、自衛隊の人たちも優しいです」
「なら、いいけど。そっか、ヨシフが見てくれるなら安心だな」
「ええ。あ、そうだ」
芹沢はラッピングされた包みを霊幻に差し出す。
「これ、霊幻さんに似合うと思って」
「へえ、何だ？」
霊幻はガサガサと包みを開けて固まる。
「これ、って、高いやつ……」
「前から霊幻さんに着て欲しかったんです……」
にへにへ笑う芹沢に霊幻は固い顔を向ける。
「芹沢、ごめん、これ俺持ってる」
「えっ、」
「毎月元カレが俺に服を送り付けてくるんだよ。いつも受け取り拒否するんだけど、拒否しそこねたやつに入ってて……だから、これは返品してくれ」
芹沢は戸惑って霊幻を見つめる。
「で……でも、これは、俺が、霊幻さんに買ったものなので……う、受け取ってくれませんか……？」
言ってから芹沢は後悔する。同じ服を２着持ったって霊幻が困るだけだ、と。
「……分かった。これは受け取る。でもな、芹沢」
苦しそうに霊幻は芹沢の手をテーブルの下で包む。
「俺は、お前と食べるなら何でも美味しいし、プレゼントなんて無

くてもいつでもヤらせてやるから、」
ふわりと儚げに微笑う。
「俺のために無駄遣いしないでくれ」
「……はい……」
芹沢は項垂れた。

※

「はぁー……」
夜学にて。
「どしたんザワちゃん。今日は上の空じゃん」
「実はさ、恋人にご飯奢ってプレゼントもしたんだけど、あんまり喜んでもらえなくて……」
ぐっ、と学友たちが身を乗り出してくる。

「「「詳しく話してみ？」」」

「調味ホテルに連れて行って！？七万の服渡したぁ！？」
叫び声が教室に響き渡る。
「そりゃあ……そりゃあ恋人さんビビっちゃうよ……」
「プロポーズされるかと思ったんじゃね？」
「あんなぁ、ザワちゃん。どんな物にも『丁度』ってのがあるもんなのよ。過ぎたるは及ばざるがごとしって言うだろ？多くても少なくても良くないのよ」
「……丁度」
芹沢は口の中で反芻する。
「付き合ってまだ１月経ってないんだろ？誕生日でもないんだし、高価な物を贈られたりしたらなんか借金の保証人でも頼まれるのかって普通なら警戒しちゃうって」
「とはいえ見栄は張りたい。彼女さん美味しいもの好きなんだろ？いいご飯食べさせたい。ってのは分かる。よーく分かる。そういう時はちょっといいとこ連れていくのよ、ちょっとだけ贅沢なとこ」
ちょっとだけ贅沢、と思いを馳せて芹沢は青くなる。全然知らな

い。
「た、食べログとかに載ってるかな……！？」
「任せとけっておススメのところ教えてやるから」
学友たちがこぞってノートにレストランや料理屋の名前を書き込んでくれる。
そのページを、芹沢は嬉しく眺めた。

※

ラーメン屋から芹沢のアパートに直行して。
いつも通り霊幻が芹沢のスーツを脱がせようとした瞬間に、霊幻の携帯が鳴った。
「ごめん、ちょっと待ってて」
「あ、はい」
霊幻はポケットから携帯を取り出して電話に出た。
「はい、どうしたんだよ、テルくん」
その名前にざわ、と芹沢の胸が掻き乱される。
「ん？ああ、しばらく大丈夫だって。また連絡するよ……うん、うん、ははは、大変だったな」
霊幻は電波のいい場所を求めて芹沢の部屋のベランダの掃き出し窓に近づいていった。
「そっか、学校頑張れよ。うん、それじゃ、おやすみ」
（あ）
芹沢は理解してしまった。花沢は多分、霊幻におやすみを言いたくて、霊幻におやすみを言われたくて、電話をかけていたのだ。
（なんか嫌だ）
芹沢が見送った後、霊幻は別の男にいつも、電話でおやすみを言っていたのだろうか。そういえば芹沢が夜におやすみを言おうとしてかけた時、話し中のことも多かった。
「お待たせ」
「あの、霊幻さん」
携帯をしまって芹沢に向き直った霊幻に、芹沢は緊張した声をかける。

「なんだ？」
「あの……上手く言えないんですけど……俺、霊幻さんにおやすみって言いたいんです。夜、霊幻さんにおやすみって言われたいんです。できれば……元カレに、おやすみって言われて、眠らないでくれませんか」
霊幻はしばし考える。
「……夜、お前以外の電話には出て欲しくないってこと？」
「いえ！そういうわけじゃないんです。……なんて言ったらいいかな……」
うーん、と霊幻は眉を寄せる。
「……本当に緊急の電話なら、留守電を残すか何度もかけてくるだろうから、掛け直すことにする。それ以外は翌朝かけなおす。誰か元カレからおやすみって言われたら……芹沢にかけておやすみを上書きしてもらう。これでいいか？」
「！は、はいっ！……すみません、お願いばかりして……」
ゆるく霊幻は首を振る。
「俺こそ、気がつかなくてごめんな」
「……っ、謝らないでください。俺が言って、霊幻さんがきいてくれた。それだけのことじゃないですか。霊幻さんは何も悪いことしてないんだから」
霊幻は目を丸くする。
花が綻ぶように微笑んで。
「……そっか」
どこか遠い目をした。
「ちょっと待っててな、すぐ準備するから」
「あっ、脱がせていいですか？」
スーツを脱いで準備しようと思った霊幻を芹沢が止める。
「え、あ、いい、けど、」
「じゃあ失礼して」
芹沢は霊幻のジャケットを滑り落として、シャツ越しの背中を抱きしめる。
「っ！」
霊幻の身体がこわばった。

「あっ、嫌でしたか？」
「……いや、大丈夫……」
きゅ、と霊幻は芹沢の背中のジャケットを少しだけ摘み返した。
「あー霊幻さん、あったかくていい匂い……」
芹沢は熱い息を吐きながら、霊幻の首筋に鼻を埋めて、手で背中や尻を激しくまさぐる。
「あ……ッ」
マッサージのような愛撫に、霊幻もまた熱い吐息を漏らした。
「霊幻さん……」
頭を撫でようとした芹沢に、霊幻はビクッと首をすくめて目をつぶる。
「あっすみませ、嫌でしたか！？」
「いや、ただの条件反射で……大丈夫、大丈夫……」
霊幻は芹沢の手に頬擦りする。その手を、自らの頭に乗せた。
「霊幻さんの髪の毛、ふわふわでサラサラで、すごく気持ちいいです」
「……そっか」
霊幻は安心したように目を閉じて、芹沢の手に身を委ねた。
「れ、霊幻さんっ、霊幻さん……！」
「あっ！」
ごり、と硬くなったものを擦り付けられて、反応しかかっていた霊幻自身も刺激される。
「やっ……芹沢ぁっ、服、汚れるから……っ！」
「……っ、じゃあ、下着で……ッ」
芹沢は２人のズボンの前を開けて、下着越しのドライハンプを続ける。
「ゃっ……あ、あぁっ……」
はぁっと霊幻が悩ましい吐息を漏らす。布越しの刺激がもどかしく、焦らされるように昂らされていく。
「ん、んんッ、〜〜〜〜ッ芹沢……っ！」
過ぎた快感に思わず芹沢を突き放そうとした霊幻の手をさっと捉え、芹沢は一歩踏み出してぐりっと股間を捏ねるように押し付けた。

「あぁ……ッ」
ふる、と震えて霊幻が絶頂に堕ちる。すとん、と足元に落ちたスラックスを追いかけるように、下着が含み切れ無かった精液が足を伝って流れていった。
「うわ、エッチだ」
「ばか……っ」
慌てて自分もズボンを脱いだ芹沢が霊幻の下半身を見て感嘆を漏らす。霊幻は思わず両手で芹沢の目を塞いだ。
「気持ち良かったですね。これなら相談所でもできそうだ」
「おい何考えてる？」
「あはは」
笑ってごまかす芹沢に霊幻は訝しげな目を向けた。
「じゃあ今度こそ俺、準備してくるから」
鞄からイチジク浣腸を取り出して霊幻はトイレに消える。
芹沢は風呂場に行って、さっと下半身を流した。
「はー、お待たせ」
気だるげにトイレから出てきて、いつものようにフェラチオをしようとする霊幻を、ぐいっと芹沢が持ち上げる。
「んお？」
そのままどさっとベッドに押し倒した。
「え、っ」
焦って立ちあがろうとする霊幻の手を縫い止めて、芹沢は霊幻に覆い被さった。
「……嫌でしたか？」
無防備に自分のベッドに横たわる身体への興奮を隠さないまま、それでもガッつかないように我慢して芹沢が震える手で霊幻の髪をすきながら問う。
「だ、いじょうぶ」
「よかった」
言い切らないうちに芹沢は霊幻の頭の横に顔を落として、ぐちぐちと耳殻を舌でねぶり始めた。
「ひ、ぁっ、」
ぞぞぞと霊幻は鳥肌が立つ。脳の近くで生き物が蠢くことへの、生

理的な反応だった。
「……気持ちいいですか？」
「わ、わかんな……っあ！」
耳をなぶりながら、芹沢が霊幻の陰茎を手筒で擦り始める。
「やっ……あ、あ！すごっ……ァあ……ッ！」
グチグチと水音で脳を犯されながら、敏感になっている性器をリズミカルに擦られたらたまらない。
「んッ……い、ィっ……！」
びく、びくとモモが痙攣し始めたのを見て、芹沢は慌てて手を離す。
「すみません、何度もイったら辛いですよね」
さっと霊幻の耳をティッシュでぬぐって、足元に移動した。
「今日は知りたいことがあって」
芹沢はローションをまぶして、ぐぬ、と右手の中指を霊幻の中に埋めた。
「！お、おいっ、ほぐしてあるから大丈夫だって！そんな汚いとこ触るなよ……！！」
「？爪切ってあるから大丈夫ですよ」
「そーじゃねーよ！！……っ、ん、さ、触るなら、優しく……っ」
「分かりました」
「……指の腹で……押し込んだりは、大丈夫だから……」
「はい」
芹沢は注意深く指を出し入れして、少しずつ内部を探る。
「霊幻さんって前立腺、感じるんですか？」
「え、っ……？ッあ！？」
「ああ」
こり、としたものを押した途端跳ねた身体に芹沢は目を細めた。
「感じるんですね」
「……！！」
何故か霊幻は知られてはならない弱点を知られた気分になる。
「ゃっ、あっ、あんっ」
ぐ、ぐ、と何度も前立腺を押し上げられて嬌声が霊幻の口からこぼれる。

「可愛い」
容赦なく霊幻を快感に叩き込みながら目を細める芹沢を、ぎっと霊幻は睨みつける。
「っぁ、も、さっさと挿れて終わらせろよ……！っひ、ん……！」
「嫌ですよ、せっかくこんなに可愛いのに」
「っ、ん、あく、しゅみ……！っあイく……！」
ぴた、と芹沢は手を止める。
また熱を出さずに放置されて、霊幻は粘っこい涙を流した。
「うーん、そうですね、霊幻さんを好きになるくらいですから、趣味はいいとは言えないでしょうね」
「おっまえな……」
「……いや一周回って趣味がいいのか？」
沢山の人をとりこにしたビッチを好きになるっていうのは、どういうことなんだろう、と芹沢は自問自答する。
「まあ何というか……俺は霊幻さんが思ってるほどノーマルではないですよ。たぶんですけど」
くるくるとゴムを付けて、芹沢は霊幻の足をよいしょと持ち上げる。
「あ……ッ！」
ぐぷ、と先端が侵入してきて、ぞくぞくとした甘い痺れに霊幻は仰け反った。
寸止めをされ過ぎて、限界なのである。
「せりざわ……っ、もっ、いく……！」
「ええ？挿れただけで、ですか？」
くす、と芹沢は耳元で笑って。
「エッチだなぁ」
ふ、と息を耳の中に吹き込みながら、囁いた。
「～～～～っ♡♡♡♡」
霊幻は背筋を走った電流に逆らわず、びゅくっと精液を腹に飛ばす。
「あ……♡あ……♡」
ひくんひくんと蠕動する内部を芹沢は容赦なく割り開いていく。
「やぁっ♡イったばっか、だからぁっ♡♡」

身を捩って上に逃げようとする霊幻の腰を掴み、どちゅんと深くまで芹沢は押し入った。
「あぁああっ♡♡♡」
霊幻の足がぴぃんと緊張する。
「ゃあっ♡ん、っ♡お、くぅ……っ♡」
「すみません、痛かったですか！？」
慌てて身体を引こうとする芹沢の腰をガッと霊幻は足で抱え込む。
「イイ、からっ……きもち、いい、からっ……♡」
いっぱい突いて？
「……っ！！」
その囁きは一瞬で芹沢の理性を吹き飛ばす。
「ぁっ♡ああっ♡っはぁ……っ♡」
ずちゅっ、ずちゅっと激しく抽挿され、びりびりと肌に絶頂の震えを残したままの霊幻がうっとりと喘ぐ。
「あっ、ぅ……♡すごいの、くるぅ……♡♡」
ぎゅう、と芹沢に抱きついて。
「―――っ♡♡♡♡」
びく、びくと腹を震わせて霊幻は深いメスイキをした。
「っ俺も……！」
「っン♡」
ぐり、と先端を奥に押し付けて、芹沢も気持ち良く吐き出す。
「……っ、霊幻さん、気持ち良かったですか……？」
「ん、ッ♡」
芹沢が逸物を抜き取る感覚にぞくりとしながら、霊幻が頷く。
が、その後に恥ずかしそうに芹沢の布団に頭まで包まる。
「馬っ鹿お前！明日も仕事なのに、むさぼりやがって！！」
「ちょっと霊幻さん、出てきてくださいよ」
困ったように芹沢は眉を下げる。
「うるさい俺はこのまま寝る！」
「えええ、霊幻さんがベッドを占領しちゃったら、俺はどこで寝たらいいんですか……」
「床で寝てろ！」
「えええ……」

芹沢は困りながらぽっこりと膨らんだ布団を撫でていたが、すぐに規則的になる寝息に少し後悔する。
（こんなにすぐ寝てしまうなんて……疲れさせてしまったんだな）
芹沢は仕方なく立ち上がって風呂場に向かおうとする。
と、霊幻の携帯電話が鳴った。
「あ」
芹沢は少し戸惑ってから、霊幻のジャケットを探る。
『影山律』と表示されていた。
（どうしよう）
しばらく見ていると、着信は一旦止まるが、またかかってきた。
（ずっと鳴ってたら霊幻さん起きちゃう）
芹沢は焦って特に何も考えず電話に出た。
「えと、緊急事態ですか？」
『……誰』
冷ややかな声がスピーカーから落ちてくる。はて、律はこんな声だったか、と芹沢は首を傾げた。
「あ、芹沢です」
『……っ、霊幻さんは？』
「もう、寝ちゃってて」
沈黙が続く。
「あの、もしもし？」
『じゃ、いいです。失礼します』
ブツンと電話は一方的に切れた。
「なんだったんだろう」
芹沢はまた首を傾げて、霊幻のジャケットに電話を戻した。

※

「ん……」
霊幻は冬の日差しの冷たさに震えて目を覚ます。
「あれ……なんだここラブホ……？」
寝ぼけまなこを擦って、はっと目を覚ます。
「うわっ起こせよ！ごめん芹沢……！」

「んがっ」
霊幻の横の床で、座布団の上であぐらをかいて腕を組んで眠っていた芹沢がやにわに目を覚ます。
「ふああ……早いですね、霊幻さん。コーヒー飲みます？」
「もらう……じゃなくて、本当に床で寝るやつがあるかよ……！身体大丈夫か！？」
よいしょ、と立ち上がった芹沢に霊幻は慌てた声を上げる。
「ああ、床で座って寝るの、爪の時に良くやってたんで大丈夫ですよ。慣れてます。……霊幻さん、コーヒーの前に風呂わかすんで、ちょっと待っててくださいね」
「え？……うわ、ザーメンがびがびじゃねえか！！ていうかシーツとカバーが……！！」
「洗うんで大丈夫ですよ……ふぁああ」
「うわあすまん……」
身震いしながら裸の霊幻がごそごそとシーツやカバーをはがそうとしていると、チラッと芹沢が顔を出す。
「寒いんですから、お風呂たけるまで布団につつまってて下さい。それか俺のドテラ着ててください」
芹沢は自分が着ていた半纏を霊幻に投げてよこす。
霊幻はそれをキャッチして、ありがたく羽織った。
「……芹沢の匂いがする」
ガタガタガッシャーン、とキッチンから音が響く。
「……ワザとしてるんですか？」
「何がだよ」
恨めしそうにジロジロと芹沢は自分の半纏から伸びる白い足を見て、小さく息を吐いた。
「朝メシ、食べます？」
食べる、と嬉しそうに霊幻は返した。

※

「嘘だろ、なんで凝って無いんだよ……」
始業前の施術室で、霊幻は芹沢の腰を押している。

「だから言ったじゃないですか、大丈夫だって……はあぁ気持ちいいです〜」
ふにゃふにゃと笑いながら芹沢がスーツのまま腰を押されている。
そうしていると、ガチャ、と扉が開いた。
ばっと芹沢が手をかざし、霊幻が振り返る。施錠していた筈だからだ。
「……おはようございます」
そこでは驚いた顔をして律が立っていた。
「なんだ、律くんか」
ほ、と霊幻は力を抜く。芹沢も手を下ろした。
「霊幻さん、書類整理するんでキャビネットの鍵ください。どうせアンタまたサボってるでしょ」
律は手を差し出す。
「はは、悪いな」
霊幻はポケットから鍵束を取り出して渡した。
事務所に戻ると、律はまずぐちゃぐちゃの顧客名簿をきっちりあいうえお順に並べる。
「１枚ずつ入れていけば楽だっていつも言ってるのに……」
「いやーははは……」
霊幻が苦笑しながら所長の椅子に座るのを横目に、芹沢は３人分のお茶を淹れに行く。
「また領収書こんなに溜めて……せめて月毎にまとめてくださいっていつも言ってるでしょう？」
「んははは……」
「もう……年度末に苦労するの霊幻さんなんですからね」
「分かってはいるんだけどな……」
テキパキとレシートを袋に分けていく律を見ながら、芹沢は塩やアロマの在庫チェックと発注数の割り出しをしていた。

※

「っん……」
芹沢のアパートで、霊幻を押し倒して首筋に唇を這わす。

ふ、と芹沢がベランダの方を見た時。

そこにぼうっと、律が立っていた。

「うわっ！？」
「えっどうした！？」
思わず叫び声を上げた芹沢に霊幻が戸惑う。
目線の先を追って霊幻はベランダを見るが、そこには何もなかった。
「……あの、俺何かやっちゃったか？」
「いやそうじゃないんです……」
小さく芹沢はため息をつく。
これは勝負を付けなくてはいけないかもしれない、と。
「すみません、霊幻さん。すぐ戻るんで、待っててください」
芹沢は下着とスウェット上下を着て、半纏を羽織ってアパートの外に出た。

まず、ベランダの下を覗き込む。
（……超能力者相手に無意味か）
キョロキョロと辺りを見回して、とりあえずアパートの周りを一周しようかと思った、その時。
電柱から飛び降りた律が、音も無く真っ直ぐに芹沢のうなじを狙って超能力を振りかざした。
「──いい判断だと思う」
だが。
芹沢はばっと振り返り、律の顔面をがっと掴んで、後頭部をアスファルトに叩きつけた。
「ぐぁっ！」
「俺と君の実力差は明白だ。勝とうと思うなら不意打ちが１番──成功してたなら、だけど」
ぎり、と手に力を込めながら。
「君がこれ以上何もしないなら、俺もこれ以上何もしない。──どうする？」

律は顔を歪めながら、ゆっくりと両手を頭の上に挙げた。
「了解。」
芹沢はすっと律の顔から手を外した。
「それで？何の用？」
呆れたように芹沢が言うと、律は気まずそうに目を足元に落とす。
「……霊幻さんが酷い目に遭ってないかどうか、気になって」
「で？君も復縁を迫りに来たの？」
「いいえ。振っておいてどの面下げて、って感じなので。……あの人は男運が悪いから、ほんとうに、ただ、気になっただけなんです」
「襲ってきたのに？」
「一応、貴方の実力も知りたくて。余計なお世話でしたね」
まったくだよ、と思いながら芹沢は息を吐き出す。
「あの人は、霊幻さんは、元気ですか？」
「？見ての通り、元気だけど」
「良かった」
ほ、と息を吐いた律は立ち上がる。
「帰ります」
「……何か預かって欲しいものがあるなら、預かるけど」
律は苦笑して。
「じゃあ、あの人に受け取ってもらえなかったクリスマスプレゼントを、貴方が預かっていてください。可能なら、あの人に渡して欲しい」
手のひらサイズの細い箱を律は芹沢に預ける。
「分かった」
律はふわりと闇夜に消える。
「さよなら」
それを見送って、芹沢は箱を開いた。
（高そうなボールペンだ）
胴体には『Ｒ　ｔｏ　Ａｒａｔａｋａ』と彫られている。
（オートで反撃する念が、濃縮して込められているな。ちょっとした悪霊なら一撃で倒せそうだ……）
何気なくノックしたら、先端から１０センチほど太い金属の針が飛

び出して、芹沢は飛び上がった。

※

「霊幻さん、今日のレシート出してくださいよ」
「まあそんな気はしてたけども」
しれっと相談所に来る律に芹沢は苦笑する。

霊幻がトイレに行ったので、ちょっと芹沢は伸びをした。
「あー、やっと四天王２人目かぁ……先は長いなぁ」
「いえ、僕は四天王じゃないですよ。元カレ連合の幹部です」
「四天王じゃないの！？ていうか幹部とかあるの！？！？」
「テルさんも幹部ですよ、聞いてなかったんですか？」
「初耳……」
霊幻がトイレから戻ってきて２人は一旦黙る。
芹沢の視線に気がついた霊幻が柔らかく微笑むので、芹沢は、まあいいか、と思った。

続